日本における『家礼』式儒墓について

―東アジア文化交渉の視点から（二）

吾妻重二

はじめに

本稿は当紀要第五十三輯（二〇二〇年）に発表した「日本における『家礼』式儒墓について―東アジア文化交渉の視点から（一）」にひき続き、日本における『家礼』式儒墓について検討を行なうものである。

紙幅の関係で、前稿では関連事例につき林氏墓地までしか触れることができなかった。今回はそれ以降、近世前半期以前、すなわちおおむね十八世紀前半の享保年間頃までの事例をとりあげ、『家礼』にもとづく墓にはどのようなものがあり、またどのような特色があるのかを考察したい。また山崎闇斎に始まる崎門派は日本における『家礼』史の中でも独特の位置を占めるので、別に章を立てることにする。

諸事項の記載の仕方は前稿と同じで、『家礼』式墓碑の特色をふまえ、最初に円頭型（タイプA）か尖頭型（タイプB）かをまず示し、ついで墓碑正面に刻まれた文字をかぎ括弧つきで掲げる。さらに碑身の寸法（センチ）を高さ×幅×厚さで示す。また趺（台石）については上部（第一段）の高さのみを記した。

一　日本における『家礼』式儒墓

―江戸時代前半期その一

1　堀杏庵、松永尺五

○堀杏庵（一五八五―一六四二）

㈠円頭型（タイプA）〈図1〉

「杏菴正意法眼」

碑身　百四十×四十二・五×二十一

趺　方趺　二十八

背面に「寛永十九年壬午年十一月二十日」と刻む

墳土　なし

所在　東京都港区・金地院

㈡円頭型（タイプA）〈図2〉

「杏菴正意墓」

碑身　百六×三十七・五×二十六・五（軒部分を除くと二十二）

趺　方趺　十八

右面に「寛永十九年十二月二十五日」と刻む[1]

墳土　なし

所在　京都市左京区・帰雲院[2]

堀杏庵と松永尺五は林羅山、那波活所とともにいわゆる藤原惺窩門下の四天王と称される朱子学者であり、まとめて述べたい[3]。

堀杏庵は寛永十九年（一六四二）十一月、江戸で死去し、ゆかりの南禅寺塔頭の金地院に葬られた。金地院は現在の東京タワーのすぐそばにあり、㈠がその墓である。「杏菴正意法眼」とのみ題するきわめて簡素な碑面で、「正意」とはその諱、「法眼」とは「法印」に次ぐ地位である。もともと高僧に与えられた地位だが、当時は儒者などにも授けられていたもので、死後の戒名というわけではない。林羅山や弟の永喜が法印に叙されていたことは前稿で述べたとおりである。墓碑には他には背面に死去の日付があるだけで、履歴などはまったく刻まれない。

墓碑の高さは碑身だけでも百六センチとかなり大きく、頂部が半円形の、タイプAの典型的な円頭型の形状を示していて印象的である。これが杏庵の死去に際して造られたものとすれば、荒川亀・林羅山の墓碑よりも古い。そうであれば、これも林左門や林永喜の墓碑と同様、『家礼』を意識しつつ「円首方趺」という明制を考慮したものといえよう。杏庵が朱子学者として『家礼』に関心を持っていたことはいうでもなく、寛永十三年（一六三六）に来日した朝鮮通信使製述官の権侍に、『家礼』を引用しつつ三年の喪について問うた書簡にもそのことが示されている[4]。

なお、趺は線香と供花用の溝が彫られて明らかに仏教式であることから、のちに造られたものと思われる。また石欄で囲まれた墓所の向かって右には「堀家之墓」があり、現在も堀家代々の墓地として祀られていることがわかる。

杏庵の墓はもう一つ、京都の帰雲院にある。㈡がそれである。帰雲院は金地院と同じく南禅寺の塔頭寺院で、南禅寺のすぐ裏手に位置する。こちらの墓も円頭型で、これまたシンプルに「杏菴正意墓」と題する。碑刻としては他に右面に日付があるだけである。すなわち「寛永十九年十二月二十五日」と刻むことから、江戸の金地院の墓碑から一か月あまり後、杏庵の一族の住む京都に立てられたことになる。杏庵は江戸で客死したため、京都にいる堀家の人々が分骨して住まいの近くに造墓したものであろう。

墓碑の高さは百六センチ、幅が三十七・五センチなので羅山ら林家の尖頭型よりも一回り大きい。特徴的なのは、頂部に軒（もしくは額）と呼ばれる凸出部が造られていることで、これは『家

礼』の神主の粉面部分を外した形にほかならないであろう。この神主粉面部分を外した形は、後述するように、まもなく山崎闇斎学派によって主張され、崎門派墓碑の一つの型をなすのだが、この墓碑は、それ以前に同様の発想が存在していたものとして興味深い。[5]

この杏庵墓の向かって右隣には妻の**茅原田氏**の墓碑が寄り添うように立っている。碑面には「貞順孺人茅原田氏墓」と刻む。「貞順」はおそらく私諡であり、「孺人」は夫人の中国ふうの呼称である。形状は杏庵のものと同じだが、高さが九十八センチとやや小さい。

この杏庵夫妻の墓の南には他に十一の墓碑が苔むした中にぎっしりと立っている（〈図3〉）。杏庵の子孫と三宅氏のもので、一番北側（左側）から列挙すれば**三宅澹庵**（「三宅子柔之墓」）、**堀南雲**（「敬簡先生墓志」）、**三宅誠斎**（「誠斎三宅堅恕之墓」）、**堀南湖**（「貞白先生墓志」）、**堀蒙窩**（「堀氏蒙窩正樸之墓」）、**堀蘭皐**（「堀氏蘭皐玄達之墓」）、**堀景山**（「景山堀氏正超之墓」）、**堀槐庵**（「堀氏槐菴正乙之墓」）、**堀立庵**（「堀氏立菴正英之墓」）、**堀厳山**（「厳山先生之墓」）と並び、さらに「忠靖先生之碑」がある。大正十一年刊行の『京都名家墳墓録』の記載を見ると墓の位置関係が現在とかなり違うところから、それ以後、今のように一か所にまとめられたものと思われる。[6] この杏庵の子孫のうち最も有名なのは儒医として活躍した曾孫の堀景山（一六八八－一七五七）であり、墓碑「景山堀氏正超之墓」のほかに「忠靖先生之碑」が立てられているわけだが、これは墓表に類するものといえようか。三宅澹庵は杏庵門人、三宅誠斎はその第三子である。

墓碑の形式は、南湖、南雲、厳山の墓碑および「忠靖先生之碑」が杏庵墓碑と同じく軒つき円頭型で、他はすべて林家式の尖頭型となっている。どちらにしても『家礼』式墓碑が堀家および杏庵門人に受け継がれたことがわかる。ただし、景山の墓碑の碑身はなぜか高さが約五十二センチで、他よりも小さくひかえめである。

○**松永尺五**（一五九二－一六五七）

㈠尖頭型（タイプB）〈図4〉

「尺五堂恭儉居士」

碑身　百二十一×五十四×十八（上部）・二十一（下部）

趺　方趺　二十（上部）

背面に「明暦三丁酉年六月二日」と刻む

墳土　なし

所在　京都市下京区・妙恵会総墓所[7]

㈡尖頭型（タイプB）〈図5〉

「松永昌三之墓」

碑身　七十六×二十三×十五・五

趺　方趺　二十

背面に「明暦三年六月二日」と刻む

墳土　なし

所在　京都市南区・実相寺

松永尺五は明暦三年（一六五七）六月没。墓はこれまた二つ造られている。まず㈠だが、碑面の「恭儉居士」は私諡である。「居士」は必ずしも在家の仏教信者を意味せず、『礼記』玉藻篇に「居士錦帶」（居士は錦帯す）といい、その鄭玄注に「居士、道藝處士也」（居士とは道芸の処士なり）と述べるように、もともと学芸に達していながら官に仕えない士人をいう語であった。尺五は諸藩の出仕要請を断わり、講習堂や尺五堂など京都市井の学塾で講学につとめた名士だったことからこの名が贈られたのであろう。これについては、水戸藩の徳川光圀に仕え、致仕後に「老牛」と号した篤実な儒学者安積澹泊（一六五六－一七三八）が、その墓碑に「故老牛居士安積君墓」と、「居士」の称を刻んでいることも想起されよう。

さて、尺五の墓は尖頭型で高さ百二十一センチ、幅五十四センチ、周囲の墓碑よりも高大で人目を惹く。高さ百二十一センチというのは『家礼』の四尺を和尺で計算したためかもしれない。三十・三センチ×四でちょうど百二十一センチになるからである。ただし、幅は『家礼』の所説に比べると相当広く、他に類を見ない。墓のある京都の妙恵会総墓所はもと尺五の祖先、松永弾正久秀の屋敷跡で、のちに本圀寺となり、代々松永家の塋域だったところであるから、このような大きな墓碑が造られたのもゆえなしとしないであろう。ただし尺五の行状に、

葬于洛東鳥邊山、後有故改葬于城南本國寺、親属之墳墓以在此之故也。[8]

（洛東の鳥辺山に葬らる。後故（ゆえ）有りて城南の本国寺に改葬す。親属の墳墓、此に在るを以ての故なり。）

とあるように、もともと京都東山の鳥辺山（鳥辺野）に葬られ、のちにこの塋域に改葬されたもので、この墓碑がもと鳥辺山にあったものを移したものとすれば、羅山の墓碑のすぐあとの時期に造られたことになり、時代的にはかなり古い。羅山は明暦三年（一六五七）一月に、尺五は同年六月に没しているからである。

もう一つの墓、すなわち㈡は京都南の上鳥羽にあり、父で俳人の松永貞徳の墓によりそうように立てられている。貞徳の墓碑が二メートルを超える大きさをもち周囲を圧倒しているのに対し、尺五の墓碑はその半分にも満たない。こちらの墓碑は明確な林家式であって、のちに分骨されて作られたものと思われる。

このように、尺五の二つの墓碑はいずれも『家礼』のタイプB系統の墓碑として重要である。

なお、妙恵会総墓所の尺五の墓の左右には尺五の妻の**松村氏妙倹**、長子の**松永昌易**（寸雲軒）、第三子の**松永永三**（尺信軒）ら松永家一族の墓が並んでいる。このうち松村氏と永三の墓碑は尖頭型のタイプB、昌易の墓碑は円頭型のタイプAであって、『家礼』式儒墓のつくりがその後も受け継がれたことを示している。[9]

2　中江藤樹ら

○中江藤樹（一六〇八―一六四八）〈図6〉

円頭型（タイプA）

「藤樹先生墓」

碑身　百二十二・五×三十・五×十九

趺　方趺　二十九・五（上部）

墳土　あり　円墳　高さ約八十　幅約二百二十

所在　滋賀県高島市安曇川町玉林寺前・藤樹先生墓所[10]

中江藤樹は慶安元年（一六四八）八月死去。碑面には「藤樹先生墓」と大字で刻むだけである。年譜にその葬儀に関して「門人相會、用文公家禮、葬之於小川邑玉林寺側[11]」（門人相い会し、文公家礼を用いて、之を小川邑玉林寺の側に葬る）とあるように『家礼』にのっとって造墓された。現在、玉林寺の山門前に塋域が石欄で囲まれ、中に藤樹のほか藤樹母の北川氏、藤樹三男の常省の墓の三基が並んでいて寺院境内にある仏式墓とは区別されている。

藤樹の墓は日本の儒式墓には珍しく墳土を残しており、形状も馬鬣封ではなく円型の盛り土で『家礼』のもとの形を伝えている。墓碑の形は『家礼』よりも縦長ではあるものの、タイプAの円頭型で『家礼』本来の形状となっていることも注意される。藤樹の葬儀は林家の左門や永喜よりは遅れるが、明暦二年（一六五六）の荒川亀および翌年の羅山の葬儀に十年近く先立つもので、『泣血余滴』に示された林家モデルとは別に構想された形を伝えていてきわめて興味深い。

なお、藤樹の誌石は年譜などの関連資料に関連記載がないところから、造られなかったようである。また周囲の石欄は享保六年（一七二一）に作られたものである。

○北川氏（一五七八―一六六五）〈図7〉

円頭型（タイプA）

「中江德右衞門妻北河氏墓」

碑身　百二十二・五×三十六・五×三十

趺　方趺　三十（上部）

背面に「寛文五乙巳年十二月廿二日」と刻む

墳土　あり　円墳　高さ約六十　幅約百六十

所在　同右

北川（北河）氏は藤樹の母で、その墓が藤樹の墓の向かって右側（東側）に並んで造られている。碑面にいう「德右衞門」は藤樹の父のこと。藤樹の墓と同じく円墳をもち、墓碑も円頭型であるが、幅がやや広い。「藤夫子行狀聞傳」に北川氏の死去について、

寛文五乙巳年五月廿二日卒、享年八拾有八歳也。以文公家禮之法、玉林寺之墓地先生ノ側ニ葬ムル。石碑之銘ニ中江德右衞門妻北川氏（ママ）墓トアリ[12]。

といっており、これまた『家礼』にもとづいて儒葬されたものとわかる。

○中江常省（一六四八―一七〇九）

円頭型（タイプA）
「常省先生墓」
碑身　百十八×三十・五×十九
趺　方趺　三十・五（上部）
背面に「寶永六年己丑六月二十三日卒」と刻む
墳土　あり　円墳　高さ約三十　幅約百二十
所在　同右

常省は藤樹三男で、岡山藩や対馬藩に仕えた儒者である。宝永六年（一七〇九）死去。墓碑は藤樹墓の向かって右手前に西向きに立つ。碑面は「常省先生墓」と刻み、藤樹の墓碑と同じく至って簡素である。「藤夫子行狀聞傳」によれば、常省死去に際して、

近所ノ同志相集リ文公家禮之法ヲ以テ玉林寺ノ墓地先人ノ側ニ葬ル。其後岡田季誠子諸方ノ同志之中ヘ相談シ石碑ヲ建立ス。常省先生墓ト記ス。[13]

といい、やはり『家礼』にもとづいて葬られたことが示されている。ここにいう岡田季誠は藤樹高弟岡田仲実の次子で常省の門人。藤樹の全集『藤樹先生全書』を編纂した人物である。

このように、藤樹らは陽明学者であるが、儀礼に関しては『家礼』に従っていた。彼らの墓碑は林家とは違って円頭型になっているのが特徴であり、『家礼』のタイプAの墓碑としては、堀杏庵のものと並んでおそらく日本で最も早期のものと思われる。墓碑の四周に履歴を刻まないことも林家のものとは違っている。また、いずれも円い墳土を残し、儒式の土葬であることがはっきりわかる点でも貴重である。

ちなみに、藤樹の高弟**熊沢蕃山**（一六一九–一六九一）の墓は現在、茨城県古河市の鮭延寺にある。文化年中（一八〇四–一八年）に蕃山六世の外孫にあたる草加定環によって再建されたものだが、ネットで見ると、こちらは尖頭型すなわちタイプBで、碑面に「熊澤息游軒伯繼之墓」と刻んでおり、これも『家礼』式墓碑と見てよいと思われる。[14]

3　秋田萬、野中順

○秋田萬（一五八六–一六五一）〈図8〉および〈図9〉
尖頭型（タイプB）
「夫人秋田氏墓表」
碑身　百八十二センチ×七十センチ×三十三
趺　方趺　三十九
前面から左面、背面、右面へと四周に墓表文を刻む
墳土　あり
所在　高知県長岡郡本山町・帰全山公園[15]

秋田萬と野中順の墓は本山町の帰全山公園内にある。秋田萬は土佐藩家老・野中兼山（一六一五–一六六四）の母で、慶安四年（一六五一）四月没。朱子学の信奉者だった兼山はその葬儀を『家礼』に沿って大々的に執り行ない、みずからの知行地だった本山

の地に同年六月五日、墓を造成した。その時の様子は、

慶安四年辛卯四月、丁母憂哀毀踰礼、衣衾棺槨必誠必信、到六月葬於采地本山、其間行程七里山路嶮嶢徒歩而従柩、其儀一如文公家礼、致喪三年、於其葬也、或穿壙或彫石、役夫殆千人夜以継日。[16]

（慶安四年辛卯四月、母の憂に丁う。哀毀礼を踰え、衣衾棺槨、必ず誠に必ず信にす。六月に到りて采地の本山に葬る。其の間、行程七里、山路嶮嶢にして徒歩にして柩を従えり。其の儀、一に文公家礼の如く、喪を致すこと三年。其の葬に於てや、或いは壙を穿ち或いは石を彫り、役夫殆ど千人、夜以て日に継ぐ。）

と伝えられるように、哀切かつ壮大なものであった。墓は土佐市より三十キロあまり離れた高知県北部中央の鬱蒼たる山森の中にあり、周囲を吉野川がめぐる形勝の地である。兼山は『家礼』にいうところの「山水の形勢」を考えてこの地を選んだに違いない。[17] 現在、傍らには野中兼山を祭る兼山廟や昭和四十四年（一九六九）に建てられた兼山の銅像なども作られ、公園として整備されている。

この墓に関しては文化十二年（一八一五）、武藤致和・平道父子がまとめた土佐の一大資料集『南路志』に江戸時代後期の状況が記録されており、貴重なので引用しておく。[18] ここの文中にいう「良継」はいうまでもなく兼山のことである。

正面ハ帰全之牌、則野中氏母堂之墓表にして、垂加翁之御文筆也。石面高六尺、横弐尺三寸、厚一尺一寸。……臺石方三寸五尺、高一尺三寸。墳ハ土を以て丸く長く築く。餘之三基皆同し。此北ニ向て良継之長女順の墓有。牌切石、野中良継長女順之墓ト書。（『南路志』巻六十三、忠豊公御代四、雑記、「歸全山」）

〈図10〉に掲げたのは『南路志』に載る見取図で、中央の大きな尖頭型の墓石が秋田氏の墓表、後ろ（北側）の小さな尖頭型があとにいう野中順の墓碑である。左奥および左手にあるのは兼山の遠縁にあたる野中三九郎と野中信継の墓で、ともに明暦三年（一六五七）没、同書によればこちらは自然石を使っているという。

さて、写真にも見るように、秋田萬の墓表は碑身に一部損壊はあるものの、修復によりもとの姿を今なお保っている。『南路志』によれば、台上部分が六尺（百八十二センチ）、幅二尺三寸（七十センチ）、厚さ一尺一寸（三十三センチ）、方趺の高さ一尺三寸（三十九センチ）という堂々たるもので、大きさは『家礼』の所説をはるかに超えている。これはおそらく、この墓石が「墓碑」ではなく「墓表」だからであろう。中国の礼制において墓表が形状や大きさの制限を受けないことは前稿ですでに見たとおりである。現在は小堂で覆って風雨を防いでおり、背後の墳土部分には柵をめぐらしている。

墓表には正面から左面、背面そして右面と、四周に兼山の友人山崎闇斎（垂加翁）の撰になる「夫人秋田氏墓表」の長文をびっ

しりと刻んでいるのも印象的である。

ところで、この墓表文は闇斎『続垂加文集』巻中にも「夫人秋田氏墓表銘」として載っているが、今回、本碑刻と比べてみて文字の異同がかなりあることに気づいた。碑刻の文字は上引の『南路志』のすぐ前に引用されており、武藤致和らが実地に採録したからであろう、字句が正しく反映されている。[19] ところが『続垂加文集』所載の文章は、後半三分の一ほどの二百五十字あまりがごっそり脱落するほか、文末記載の銘も途中から唐突に始まるなど、意味が通じなくなっているのである。[20] 一般に通行する『続垂加文集』は日本古典学会版復刻『新編　山崎闇斎全集』第二巻所収のものだが、調べてみると、その底本になった正徳五年版和刻本も同じ過ちをおかしている。つまりこの場合、実際の碑刻の文章およびそれを採録した『南路志』によらなければならないわけであって、江戸時代初期の『家礼』式葬儀を物語る重要史料であるだけに注意を要するであろう。

さて、墓石のつくりに話をもどせば、これは墓表ではあるが、ただし形状は尖頭型であって、『家礼』のタイプB墓碑の形をよく示している。

墳土も墓表の後ろに、高さは低いが現在もなお残っている。前引の『南路志』に「墳ハ土を以て丸く長く築く」ということころからすると、がんらいは馬鬣封形式だったかもしれない。

このほか注意すべきことは、誌石が造られていることである。闇斎撰の「秋田夫人壙誌」[21] はそこに刻まれた墓誌であって、履歴を簡単に記したあと、文末に、

葬之日、誌其姓名於石、納諸壙中。異時此地變遷、或人誤動而此石先見、則能爲掩之。此兼山所以深願而遠慮也。闇齋誌。

（葬るの日、其の姓名を石に誌し、諸を壙中に納む。異時此の地変遷し、或いは人誤ちて動かして此の石先に見ゆれば、則ち能く為に之を掩え。此れ兼山の深く願いて遠く慮る所以なり。闇斎誌す。）

と述べている。この誌石は今でも壙中に埋まっているはずである。

○野中順（一六四五―一六四八）〈図11〉

尖頭型（タイプB）

「野中良繼之長女順之墓」

趺　方趺

墳土　なし

所在　秋田萬の墓の背後（北側）

野中順は兼山の長女で、慶安元年（一六四八）六月に四歳で亡くなった。碑面にいう「良繼」は上述したように兼山のことである。闇斎撰の「順娘壙誌」[22] によれば、死後まもなく高知城北の久万山に葬られたが、慶安四年（一六五一）五月二十一日にこの地に改葬された。

墓碑は尖頭型で、高さ一メートルに満たない小型のつくりである。誌石も造られたようで、いま触れた「順娘壙誌」がその墓誌

であり、改葬の際にここの壙内に埋められた。

ここで注意したいのは、順の埋葬が慶安元年（一六四八）、改葬が同四年の五月であって秋田萬の葬儀に先立つことである。つまり順の墓碑は秋田萬の墓表よりも早く造られたことになり、よって『家礼』にもとづく尖頭型の墓碑としては、上述した荒川亀や林羅山の墓碑よりもかなりさかのぼることになる。かりに慶安四年（一六五一）の改葬時に造られたとしても、荒川亀・林羅山の埋葬された明暦二年および三年（一六五六、一六五七）より五、六年は前になるからである。そうであれば、この野中順および秋田萬の墓碑（墓表）は今のところ、日本における『家礼』のタイプBの尖頭型墓碑（墓表）としては最も早期のものということになると思われる。

4　野中兼山墓所

○野中兼山（一六一五－一六六三）〈図12〉

尖頭型（タイプB）

「野中傳右衛門良繼之墓」

趺　方趺

左面に「寛文三年癸卯年十二月十五日」と刻む

墳土　なし　ただし切石を方形に積み重ねる

所在　高知県高知市潮江高見山・野中兼山墓所

当墓所は実見していないが、松原典明氏の調査および関連サイトによれば右のとおりで[23]、中央にある兼山墓碑の形は『家礼』にもとづくタイプBの尖頭型をはっきり示している。碑面にいう「傳右衛門」は兼山の通称である。高さは一メートル余りあるようなので、『家礼』にいう四尺を曲尺で計算したのかもしれない（三十・三センチ×四＝百二十一・二センチ）。墳土はないが、切石を積み重ねて墳丘を覆う独特の形式をもっている。

もっとも、この墓碑は兼山の死後四十年ほどたった元禄十六年（一七〇三）以後、野中家一族としての幽閉を解かれたむすめの婉によって立てられたもので[24]、時代的にはやや降る。婉は山崎闇斎・浅見絅斎に学んだ谷秦山の支援を受けており、こうした崎門派の学者の教えにより、『家礼』に共鳴していた兼山にふさわしい墓を造ったのであろう。

この墓所には、他に兼山の養父**野中玄蕃**（直継）、養祖父**野中主計**（益継）、むすめの**野中婉**、兼山の妾で婉の母の**池氏**、兼山家臣で殉死した**古槇重固**（次郎八）らの墓がある。このうち古槇重固の墓碑だけが尖頭型で、あとは円頭型であるが、碑面の文字の書き方からしてもみな『家礼』にもとづく形式と思われる[25]。

二　日本における『家礼』式儒墓
――江戸時代前半その二・崎門派

1　山崎闇斎、三宅尚斎

○山崎闇斎（一六一九－一六八二）〈図13〉

尖頭型（タイプB）
「見室宗利　山崎嘉右衛門敬義之墓」
碑身　百二十九×四十八・五×二十七・五（軒部分を除くと二十五・五）
趺　方趺　二十一（上部）
背面に「天和二年九月十六日」と刻む
墳土　なし
所在　京都市左京区金戒光明寺・黒谷墓地[26]

山崎闇斎は天和二年（一六八二）九月死去。碑面の「嘉右衛門」は闇斎の通称、「敬義」は字である。その儒葬に際して闇斎が仏寺との軋轢を巧妙に避けたことはよく知られており、あらかじめ門人に命じ、僧の手を借りずに『家礼』によってみずからを墓所に土葬させる一方で、別に空の棺を作って寺に運ばせ、荼毘に付させたという[27]。碑面上部に「見室宗利」と刻まれるのは、その際に寺が授けた戒名である。浅見絅斎『家礼紀聞』にも闇斎の墓碑の図があるのでここに掲げておく[28]（〈図14〉）。

墓碑はタイプBの尖頭型だが、他の『家礼』式墓碑と違うのは、頂部の三角形のすぐ下のところに「軒」という凸出部を作っていることで、下部の碑身から二センチほど前に突き出ている。この突き出た部分は「額」とか「頷」と呼ばれることもあるが、いま崎門派の若林強斎『家礼訓蒙疏』に従って「軒」と呼んでおく（〈図15〉）。

軒をもつこの形式は、実は『家礼』にいう神主の「粉面」部分のはめ板をはずした形である。『家礼』によれば、神主は円頂平板型で、円頂の下の部分の板が前に取り外せるようになっている。この部分は表面を鉛粉で白く塗っておき、その粉面の上に祖先の名を書く。そして世代が代わると祖先の属（高祖や曾祖、祖など）も代わるため、粉面を筆で洗い去って書き改めるのである[29]。そうした粉面部分をはずした形式について、浅見絅斎『家礼師説』は、

山崎先生ノ神主ノ粉面トリタアトノヤウニシタガヨイトアルガ　マコトニ不易之法ゾ[30]。

といい、若林強斎『家礼訓蒙疏』巻三・喪礼・成墳章でも、

形ハ山崎先生ノ神主ノ粉面トリタアトノヤウニスル可也ト云ヘルガ至極ノ〻ナリ。

と伝えている。闇斎の墓碑の形はこうした闇斎年来の主張によるものであったことがわかるのだが、ただし神主の形は円頂型（円頭型）であるから、これは『家礼』にいう墓碑の「圭首」を尖頭型と解釈したものであって、単純に神主の形のままというわけではない。この点、軒をもつが円頭型をとる堀杏庵の墓碑とは違っている。いずれにしても、尖頭型で軒をもつこの形式は、後述するように闇斎学派（崎門派）によく見られるもので、崎門系『家礼』式墓碑と呼ぶことができるであろう。

また、墓碑に履歴を刻まないという特徴もある。これも林家の墓碑とは違う点で、羅山らの例で見たように、林家では『家礼』

に従って墓碑の四周に履歴をぐるりと刻むことが多いのに対し、闇斎の場合は「天和二年九月十六日」と、死去した日付のみを背面に刻むにすぎない。同様の例はこのあとの三宅尚斎や浅見絅斎、若林強斎らにも見られるところから、詳細な履歴は刻まないという点が崎門系の墓碑のもう一つの特徴になっているといえるかもしれない。

このほか、闇斎の墓碑の寸法が『家礼』の原寸法よりやや大きいのは、周尺ではなく日本の曲尺によっているからかもしれない。羅山ら林家の墓碑は『家礼』がんらいのものよりも小型だったから、それに比べると闇斎の墓碑はかなり大きいことになる。万治二年（一六五九）に京都の書肆から出版された林鵞峰『泣血余滴』を闇斎は当然読んで知っていたと思われるが、大きさや軒のつくりなど、林家のスタンダードとは違う形式が採用されたことになる。

ところで、この墓は土葬のはずだが、墳土はない。それは墓碑の下に埋葬されたからで、そのことについては絅斎『家礼師説』に、

墓表モ前ニ立ルハアノ方ノ風俗　此方デハ上ニ立ル風俗ユヘ上ニ立タガヨイ　前ニ立ルト其下ニ柩ガアルトヲモフユヘ　害ガアルゾ。[31]

といっている。これによれば、日本の習俗では中国（アノ方）と違って、墓碑を墓の前ではなく墓の上に立てるというのであって、そのことは強斎『家礼訓蒙疏』でも日本と中国（西土）の風俗を紹介して、

此方ノ風俗ハ一統ニ墓表ヲ墓ノ上ニ立ルヿナルヲ西土ノヤウニ墳ノ前ニ立レバ後生恐クハ墓表ノ下ニアルト心得ソコナフモシレヌゾ。（巻三、成墳）。

といっているとおりである。

さて、石欄で囲まれ石畳が敷かれた墓域の中には、他に七基の山崎氏の墓が並んでいる[32]（〈図16〉）。正面右から左廻りに紹介すれば次のようである[33]。

「小三娘之墓」　闇斎姪
「於玉娘之墓」　闇斎次姉[34]
「山﨑浄因處士之墓　（右行）妻佐久間氏祔」　闇斎父母
「山﨑半右衛門一覺居士」　闇斎叔父
「山﨑浄泉處士之墓　（右行）妻多治見氏祔」　闇斎祖父母
「於鶴娘之墓」　闇斎長姉
「於愛娘之墓」

これらはいずれも闇斎が造った墓である。このうち年代のわかるものとして最も早くここに葬られたのは**小三娘**であり、承応二年（一六五三）六月に埋葬されている[35]。そのことを記した闇斎の「甥女小三墓誌銘[36]」に、

葬事不能備、惟衣衾棺椁、依家禮治之。是日女舅敬義、誌石納諸幽竁、冀後人莫敢壊。

（葬事備うる能わず、惟だ衣衾棺椁のみ、家礼に依りて之を治む。是の日女の舅敬義、石に誌して諸を幽竁に納む。冀

わくは後人敢て壊すこと莫かれ。）

と、『家礼』によって埋葬したといっているのは重要で、この時に墓碑も立てられたとすれば、このタイプＡの尖頭型は野中順・秋田萬よりは遅れるものの、荒川亀・林羅山よりは早いことになる。また誌石を造って墓中に埋めたという点も注意されよう。

さて、これらの墓碑はいずれも尖頭型で、闇斎の墓碑よりも小さい。「山﨑半右衛門一覺居士」の墓碑が最も小さく、碑身の高さは七十八センチである。いくつかの碑面に「於」（ああ）という語でみずからの嘆きを表わしているのは、林左門の墓碑でも見たところである。

もう一つ注意しておきたいのは、合葬墓になっている**山崎浄因**と**山崎浄泉**の墓碑面右側に、妻の姓のあとに「祔」と記していることである。これは朝鮮の李滉の説によるもので、闇斎『文会筆録』に、

金而精問合葬之墓、碣面兩書墓字、何如。退溪答云、府君書墓而夫人只書祔字、似得宜也〔退溪集二十八〕[37]。

（金而精問う、合葬の墓、碣面に墓の字を両書するは、何如。退溪答えて云う、府君には墓と書して、夫人は只だ祔の字を書すれば、宜しきを得るに似たり。）

といっている。「退溪集二十八」は闇斎の自注で、いま『退溪先生文集』巻二十八の「答金而精」第六書簡を見ると、確かにこの問答が載っている。祔とは付することで、亡くなった人の神主を廟に新たに加える意味である。つまり、府君（夫）の場合には誰それの「墓」と記し、夫人（妻）については付け加える意味で「祔」の字を記すというのであるが、がんらいこれは『家礼』にはなかった墓碑方式で、林家のやり方とも違う。林家では妻の墓はすべて夫とは別に造られていて、合葬墓は一つもないからである。この記し方は浅見絅斎『家礼師説』や若林強斎『家礼訓蒙疏』も踏襲しているため、崎門派の『家礼』式合葬墓碑の特徴といえるかもしれない[38]。

なお、これらの墓碑はみな上部の軒の部分に梵字が刻まれている。闇斎はこれにはさほどこだわらなかったようで、門人に対して「如何様モ寺法ナレバ、住持ニ任スベキ由ノタマフ」としたことが伝わっている[39]。

○三宅尚斎（一六六二―一七四一）〈図17〉

尖頭型（タイプＢ）

「尚齋三宅先生之墓」

碑身　八十×三十×二十一

趺　方趺　十八（上部）

墳土　なし

所在　京都市左京区金戒光明寺・黒谷墓地[40]

三宅尚斎は山崎闇斎門人で、佐藤直方、浅見絅斎とともに崎門三傑と称される。寛保元年（一七四一）正月死去。墓は闇斎墓所の北二十メートルほどのところの同じ黒谷墓地内にあり、低い石

欄で墓域を囲うとともに石畳を敷く。その墓碑はこれまた『家礼』式で、労作『朱子家礼筆記』全七巻九冊を著わし『家礼』の研究に取り組んだ尚斎らしいつくりである。形は尖頭型で、大きさは林家のものにほぼ等しい。

ただし注目されるのは、正面に深さ三センチほどの縦長の彫り込みを入れ、中に「尚齋三宅先生之墓」と刻んでいることである。これは『家礼』の神主にある「陷中」（縦長の彫り込み）にならったものに違いない。

墓域内には他に三基の墓が立てられている。次のとおりである。

「三宅重固繼室／信室田代氏之墓」

「壽貞岡部氏之墓」

「三宅一平之墓」

田代氏は尚斎の妻で、尚斎の墓の向かって右側に並んで立てられている。碑面にいう「重固」は尚斎の名である。一平は尚斎の子の**三宅重徳**（一七〇二―一七三二）で、尚斎に先立って三十一歳で死去した。写真に見るとおり、いずれも尚斎の墓より小型である。

また、一平の墓碑が尖頭型なのに対し、女性二人（田代氏と岡部氏）の墓碑は円頭型である。女性の墓碑を円頭型に造って男の尖頭型に対比させるのはすでに野中兼山墓所に見られたところだが、他にもその例は少なくないようである。これは日本の『家礼』式墓碑にだけ見られる特徴なのではないかと思われる。

2　浅見絅斎、若林強斎

○浅見絅斎（一六五二―一七一二）〈図18〉

尖頭型（タイプB）

「淺見絅齋先生之墓」

碑身　八十・五×三十一・五×二十・五（軒部分を除くと十九・五）

趺　方趺　十六（上部）

背面に「承應元年壬辰八月十三日生、正徳元年辛卯十二月朔日終、享年六十歳」と刻む

墳土　なし

所在　京都市東山区延年寺旧跡墓地[41]

浅見絅斎は佐藤直方、三宅尚斎とともに崎門三傑と称され、闇斎の学統を受け継ぐ。正徳元年（一七一一）十二月死去。『家礼師説』や『家礼紀聞』、『喪祭小記』など『家礼』に関する筆記があるほか、和刻本『家礼』を校点し図を付して出版することで、日本における『家礼』の普及に大きな役割を果たした。

墓所はいわゆる鳥辺山の最も奥まったところに位置し、石欄を設け石畳を敷いて、絅斎ら数基の墓を造っている。絅斎の墓碑は尖頭型で軒をもち、大きさは前述の三宅尚斎のものとほぼ同じだが、正面の陷中（彫り込み）はない。現在、昭和四十二年（一九六七）に造られた小堂に覆われていて背面が見えないため[42]、背面の文字は寺田貞次『京都名家墳墓録』によって記しておいた。

墓域には次の墓碑もある（〈図19〉）。

「淺見某室／井口氏桂室之墓」　絅斎妻

「淺見氏秋庭之墓」　絅斎姪（兄道哲のむすめ）

「淺見氏操室之墓」　絅斎姪（兄道哲のむすめ）

「淺見持齋之墓」　絅斎甥（兄道哲の長子）

「淺見道哲之墓（左側）妻　佐川氏正室祔」　絅斎兄とその妻

「淺見常宅之墓」　絅斎弟

このうち「淺見某室／井口氏桂室之墓」、「淺見持齋之墓」、「淺見道哲之墓」の三基は絅斎の墓碑とほぼ同じ大きさで、他は少し小型である。これらのうち没年の最も早いのは元禄十四年（一七〇一）に亡くなった**浅見氏操室**で、墓碑も死後まもなく立てられたものと思われる[43]。

なお、絅斎の語録「常話雑話」によれば、宝永二年（一七〇五）八月、絅斎は継母山本幾佐氏の墓を『家礼』にもとづいて「鳥邊原先塋之南側」に作っているが[44]、現在は見当たらない。これは別の場所に営まれたのか、それとも墓が失われてしまったのか、どちらかわからない。

さて、軒をもつ絅斎の尖頭型墓碑は、闇斎の墓碑が大型で戒名を刻むのとは違い、また同門の尚斎の墓碑が神主ふうの陥中をもつのとも違っていて、その後、絅斎の継承者によって受け継がれた形式らしい。そのことについては近藤啓吾氏が絅斎の墓につき、この墓の制は、若林強斎（大津五本桜）、西依成斎（京都清閑寺）、奥野一族（寧斎・淡斎・坦斎等、大津伝光院）、川島栗斎（伝光院）、大沢鼎斎（小浜西福寺）、池永近江守（姓宇佐、名公倫、天明元年八月九日、望楠軒に卒す、年十有九、鳥辺山墓地）、吉田東篁（福井市東墓地）等、絅斎の学を継ぐ者相承け固く守ってきたものであって（以下略）[45]

といっている。これらの墓については、若林強斎を除いて未調査であるが、絅斎系の『家礼』式墓碑の系譜として記憶にとどめておいてよいであろう。

ところで、この絅斎墓所は清水寺の本堂と五重塔をすぐ東方に臨む風光明媚の地であって印象深いが、調査して驚いたのは、すぐ手前に心学運動の指導者、**石田梅岩**、**手島堵庵**、**中沢道二**、**柴田鳩翁**らの墓碑が並んでおり、いずれも絅斎とまったく同じ『家礼』式尖頭型の形になっている点である。彼ら心学者の墓がみな『家礼』式になっているのはなぜなのか、これまでまったく論じられたことがないようではなはだ興味深いが、その検討は後稿に譲りたい。

○**若林強斎**（一六七九－一七三二）〈図20〉

尖頭型（タイプB）

「若林強齋先生之墓」

碑身　八十・五×三十二×二十三（軒部分を除くと二十・五）

趺　方趺　二十七・五（上部）

背面に次の簡単な履歴を刻む

先生平安人姓若林名進居俗稱新七強齋
其號也晩稱自牧號其居曰望楠軒以延寶
年己未七月八日生以享保十七年壬子正月
廿日没稟年五十有四
寛政八年丙辰春三月　後學某等改建
門人　西依周行書時年九十五

墳土　なし

所在　滋賀県大津市小関町・五本桜墓地[46]

若林強斎は浅見絅斎門人で、『家礼』を和文で解説した労作『家礼訓蒙疏』で知られる。同書は闇斎や絅斎の説を取り入れた、いわば崎門系『家礼』研究を集成した著作として刊行され、影響が大きい。

強斎は享保十七年（一七三二）一月死去。墓は大津から京都に抜ける小関越手前の山中路傍にある。その墓碑面には「若林強齋先生之墓」とのみ記し、背面の履歴も簡潔な記述にとどまる。軒をもつ尖頭型であること、高さ八十センチあまりという大きさなど、いずれも師の絅斎にほぼ等しい。

いま『家礼訓蒙疏』を見ると、巻三・喪礼・成墳章に墓碑の高さを曲尺で「二尺五寸バカリ」としている。これは林鵞峰『泣血余滴』が「今尺二尺五寸五分餘」というのに倣うもので、約七十六センチに当たる。八十・五センチという強斎墓碑の碑身はおおむねそれに合致している。また前に引いたように「圭首ハ象戯ノ駒ノ首ノヤウナルヲ云」とすること、墓碑の形を「神主ノ粉面トリタアトノヤウニ」作るべしとすることなど、『家礼訓蒙疏』の所説どおりのつくりになっている。

なお、墓碑にはもと「若林自牧墓」と刻まれていたようだが[47]、背面の墓碑文に見るように、現在の墓碑は寛政八年（一七九七）に門人西依成斎（周行）らが再建したものである。これは強斎の死去後六十年あまり経っているが、崎門系の構想を忠実に再現したものになっているといえよう。

墓所は石組で一段高くなっており、強斎の墓は石欄で囲まれている。墓所内の向かって右側には父の**若林長軒**（一六三八－一七一〇）の墓があり、強斎と同じく軒つき尖頭型である（〈図21〉）。さらに墓所左手前には**北條定斎**（一七六二－一八一五）と**北條左源太**（一七九二－一八一二）の墓が並んでおり、前者は軒つき尖頭型、後者は林家系尖頭型である。墓所の周囲には、他にも『家礼』式儒墓が散見される。

結びにかえて

本稿では前稿での考察をふまえつつ、日本における『家礼』式儒墓につき実地調査と文献資料を用いて論じてきた。紙数の関係で江戸時代前期の一部と崎門派の事例を述べるにとどまったが、『家礼』にもとづく葬祭実践が当時の儒者にとっていかに重要だったかを改めて示すことができたと思われる。

ここで取り上げた人物はいずれも日本近世を代表する思想家として著名であるが、「墓をどのように作るか」という問題は彼らにとってけっして軽々しい問題ではなかった。それは儒者としてのアイデンティティにかかわる本質的営為であり、みずからの生き方や死生観、思想の根幹にかかわる事柄でもあった。考察はやや細部にわたったが、それも従来、この問題について調査、研究が十分なされてこなかったからである。

取り上げるべき事項はなお多く残っており、次稿でも儒教にもとづく近世期の墓制につき引き続き検討する予定である。

注

（1）腐食が激しいため、碑刻の文字は寺田貞次『京都名家墳墓録』（一九二二年初版、一九七六年覆刻、村田書店）「堀杏庵墓」（四一六頁）によった。

（2）筆者が調査、撮影したのは二〇二〇年二月二十四日である。

（3）堀杏庵の墓については、大島晃『日本漢学研究試論』（汲古書院、二〇一七年）所収の「先学の風景　堀杏庵」が参考になる。

（4）『杏庵稿』三に掲載する、権代との問答五条のうちの「喪辨」。鵜飼尚代「堀杏庵と朝鮮通信使」（『愛知女子短期大学研究紀要』第三十三号、二〇〇〇年）参照。

（5）なお、尾張初代藩主徳川義直の墓は儒式として有名であるが、やはり『家礼』にいう神主の粉面部分を外した形態をとっている。義直は慶安三年（一六五〇）に死去、墳墓と墓碑が翌慶安四年に作られているから堀杏庵の墓碑の影響を受けた可能性もある。後考を俟ちたい。

（6）注1に同じ。

（7）筆者が調査、撮影したのは二〇二〇年二月二十四日である。あとの実相寺も同じ。

（8）「尺五堂恭倹先生行状」、『尺五堂集』乾巻（『尺五堂先生全集』、（ぺりかん社覆刻、二〇〇〇年）。

（9）なお、羅山や杏庵、尺五の師であった藤原惺窩の墓は京都市上京区相国寺東門外、薩摩藩戦死者墓地の北側にある。墓碑は『家礼』のタイプAを彷彿とさせる円頭型だが、碑面に刻まれるようにこの墓碑は明治二十一年（一八八八）、恩賜金によって新たに建てられたものなのでここでは取り上げなかった。

（10）筆者が調査、撮影したのは二〇二一年二月二十三日である。

（11）川田氏本「藤樹先生年譜」（『藤樹先生全集』第五冊、岩波書店、一九四〇年）三三頁。

（12）「藤夫子行狀聞傳」（『藤樹先生全集』第五冊、岩波書店、一九四〇年）二頁。

（13）「藤夫子行狀聞傳」一二頁。

（14）茨城県古河市ホームページ（https://www.city.ibaraki-koga.g.jp/lifetop/kogameguri/history_cultual_property/1/4894.html、二〇二一年二月二十一日閲覧）。

（15）筆者が調査、撮影したのは二〇一七年三月二十九日である。

（16）『野中兼山関係文書』（財団法人 高知県文教協会、一九六五年）

（17）山崎闇斎「帰全山記」（『続垂加文集』巻上、『新編　山崎闇斎全集』第二巻、ぺりかん社、一九七八年）に、この地を「土色潤澤、艸木茂盛」と表現する（三四七頁）。これは『家礼』巻四・喪礼「治葬」章に墓所につき「土色之光潤、草木之茂盛」というのと同じである。ちなみにこの「帰全山記」は秋田萬の埋葬時に墓所の山を「帰全山」と命名した由来を記したもので、『礼記』祭義篇に孔子の語として伝える「父母全而生之、子全而歸之、可謂孝矣」によっている。

（18）秋澤繁ら編集『南路志』第六巻（土佐国史料集成、高知県立図書館、一九九三年）一六二頁。

（19）「夫人秋田氏墓表」はこのほか『南路志』巻四十二・詩文集（中）「十

四　碑刻」にも引用されている。秋澤繁ら編集『南路志』第四巻（土佐国史料集成、高知県立図書館、一九九二年）二四六頁。ただし、そこに付された訓点は出版の際に新たにつけられたもので、原文は白文である。ちなみにこの墓表文は糸賀國次郎『海南朱子學發達の研究』（成美堂書店、一九三五年）六一頁にも引用される。

（20）『新編　山崎闇斎全集』第二巻の『続垂加文集』でいえば、三五七頁上段九行目、「崇佛」と「氣之」の間に二百五十余字の脱文があるのである。

（21）『続垂加文集』巻中（『新編　山崎闇斎全集』第二巻）三五五頁。造墓の六月五日の日付も「秋田夫人壙誌」による。

（22）『続垂加文集』巻中（『新編　山崎闇斎全集』第二巻）三五五頁。

（23）松原典明「土佐南学の墳墓形式から神道墓所様式の成立についての予察」（『石造文化財』八、二〇一六年）。〈図12〉の写真は「野中兼山墓所」（https://tosareki.gozaru.jp/tosareki/shinai/kenzanbosho.html、二〇二一年二月二二十七日閲覧）。

（24）高知市役所編『高知市史』（名著出版、一九七三年複刻）五一六頁による。

（25）婉の墓以外はいずれも婉が立てたものという。ちなみに婉は大原富江の小説『婉という女』の主人公として知られる。

（26）筆者が調査、撮影したのは二〇一七年三月二十九日である。

（27）近藤啓吾「崎門學派における朱子家礼の受容と超脱」（近藤『儒葬と神葬』、国書刊行会、一九九〇年）一〇〇頁。

（28）吾妻重二編著『家礼文献集成　日本篇』九（関西大学出版部、二〇二一年）に『家礼紀聞』の影印を載せた。

（29）神主のつくりについては、吾妻重二「近世儒教の祭祀儀礼と木主・位牌――朱熹『家礼』の一展開」（吾妻重二主編・黄俊傑副主編『国際シンポジウム　東アジア世界と儒教』、東方書店、二〇〇五年）参照。

（30）『家礼師説』は小浜市立図書館・酒井家文庫蔵本による。注28吾妻重二編著『家礼文献集成　日本篇』九にこれを影印、翻刻した。その一四四頁参照。

（31）注28吾妻重二編著『家礼文献集成　日本篇』九、一四四頁参照。

（32）澤井啓一『山崎闇斎』（ミネルヴァ書房、二〇一四年）三三頁に墓所の見取り図があり、参考になる。なお、この石欄や石畳は宝暦二年（一七六二）、留守希斎らによって作られたものである。岡直養輯録「闇斎先生塋域修補給工費姓名簿」（『崎門學派系譜』附録二、岡田武彦ら編『楠本端山　碩水全集』所収、葦書房、一九八〇年）参照。また、近藤啓吾「山崎闇斎先生墓所修理および山崎闇斎先生三百年祭について」（近藤『山崎闇斎の研究』、神道史学会、一九八六年）。

（33）注1寺田貞次『京都名家墳墓録』四六三頁以下を参照した。また松原典明『近世大名葬制の考古学的研究』（雄山閣、二〇一二年）二七二頁にこれらの墓碑の実測図がある。

（34）以下の山崎家の人々の続柄については「山崎家譜」（『垂加文集』巻七、『新編　山崎闇斎全集』第二巻）三三七頁以下参照。

（35）もちろん死去したのは闇斎の祖父母の方が早いが、彼らはもともと知恩寺に埋葬され、この地に改葬されたのは寛文三年（一六六五）である。前注所掲「「山崎家譜」参照。

（36）「甥女小三墓誌銘」（『垂加草』巻二十八、『新編　山崎闇斎全集』第二巻）二二二頁。

（37）『文会筆録』巻一之三（『垂加草』巻十二、『新編　山崎闇斎全集』第一巻）一二一頁。

（38）『家礼師説』成墳に「合葬ノトキハ夫婦一石ニカクモアリ……一ニカケバ夫ノ稱號ヲ中ニカキ　妻ハ祔シタルガヨイゾ」（注28吾妻重二編著『家礼文献集成　日本篇』九、一四五頁）といい、『家礼訓蒙疏』巻三・喪礼・成墳章に「書法ハ夫ハ正中ニ某某之墓、婦ハ其右ニ少低ク文字モ少シ小サク妻某氏某室祔ト書スベシ」という。

（39）近藤啓吾「崎門學派における朱子家礼の受容と超脱」（注27近藤『儒葬と神葬』）一〇〇頁。

（40）筆者が調査、撮影したのは二〇一七年三月二十九日である。

(41) 筆者が調査、撮影したのは二〇一九年十二月二十五日である。
(42) この小堂の建設および墓域の修理については、近藤啓吾「浅見絅斎墓域修理記録」（近藤『浅見絅斎の研究』所収、神道史研究会、一九七〇年）参照。以下の絅斎親族の続柄についても同論文による。
(43) その「哀姪女文」が近藤啓吾・金本正孝編『浅見絅斎集』（国書刊行会、一九八九年）五〇五頁に載る。
(44) 「常話雑記」、近藤啓吾・金本正孝編『浅見絅斎集』（国書刊行会、一九八九年）五六六頁。なお近藤啓吾氏も、絅斎継母あるいは父道斎の墓は現在の浅見家墓域内にはなく、また鳥辺山全域にも見当たらないという。注42近藤啓吾『浅見絅斎の研究』二一頁。
(45) 注42「浅見絅斎墓域修理記録」三九〇頁。
(46) 筆者が調査、撮影したのは二〇二〇年三月三日である。
(47) 近藤啓吾「若林強齋墓域修理記録」（近藤『若林強齋の研究』所収、神道史学会、一九七九年）による。また同記録によれば、石組と石欄を造り、父長軒の墓を同じ墓域に移したのは大正二年（一九一三）のことらしい。

図２　堀杏庵の墓（帰雲院）
右は杏庵妻の妻の茅原田氏墓

図１　堀杏庵の墓（金地院）

図３　堀杏庵墓所（帰雲院）　左側が杏庵夫妻の墓、右手前の小型の尖頭型墓碑が景山墓

図５　松永尺五の墓（実相寺）
中央は貞徳墓、右が尺五墓

図４　松永尺五の墓（妙恵会総墓所）

図６　中江藤樹の墓

図７　中江藤樹墓所　左が藤樹墓、
中央が北川氏墓、右が中江常省墓

図８　秋田萬の墓１　後ろは野中順墓

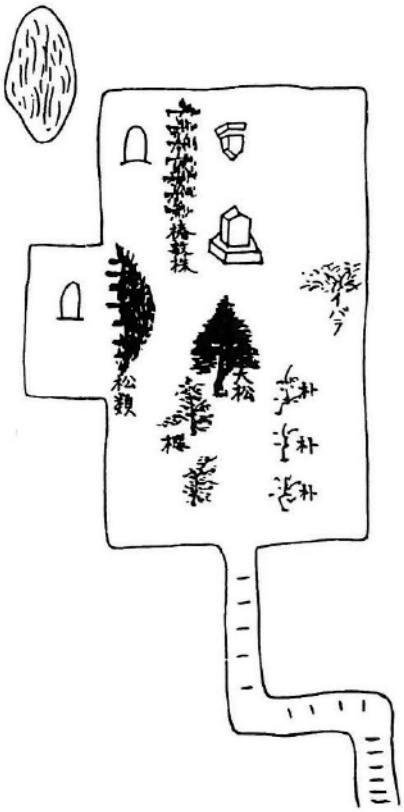

図10　秋田萬墓見取図（『南路志』巻63）

図９　秋田萬の墓２

図11　野中順の墓

図12　野中兼山墓所　中央が兼山墓

図13　山崎闇斎の墓

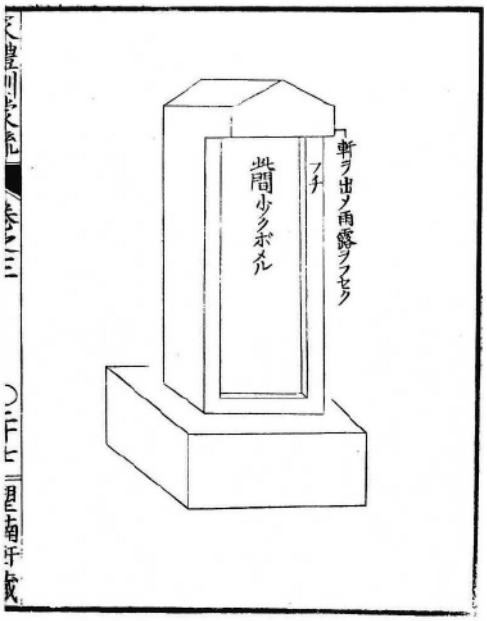

図15　軒をもつ墓碑（墓表）図
（若林強斎『家礼訓蒙疏』巻３）

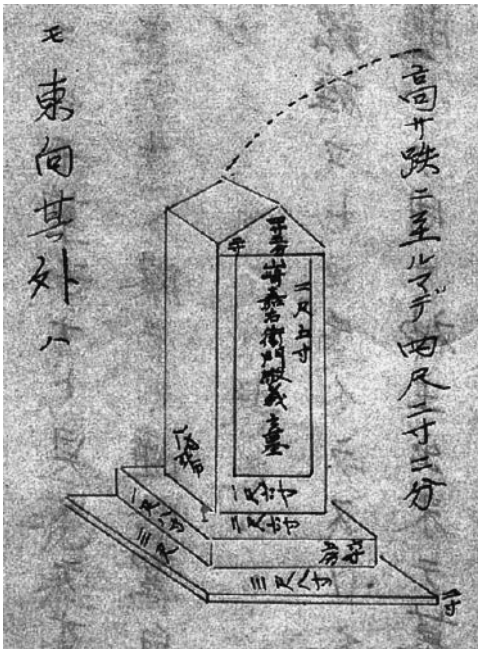

図14　山崎闇斎墓碑図（浅見絅斎『家礼紀聞』）

図16　山崎闇斎墓所　左が闇斎墓

図17　三宅尚斎墓所　左が尚斎墓

図18　浅見絅斎の墓

図19　浅見絅斎墓所

図20　若林強斎の墓

図21　若林強斎墓所　右は長軒墓

Jia-li Style Confucian Tombs in Japan:
A Study from the Perspective of Cultural Interaction in East Asia, Part 2

AZUMA Juji

During Edo-period Japan, many Confucian tombs were constructed based on Zhuxi's *Jia-li* of Nansong China. However, there is little research on this subject. Continuing from the previous article, this paper will show the grave system and its characteristics through field surveys and literature materials. This paper will illuminate the ideological work of Confucianism in Japan.

キーワード： 朱子学（Zhuxi's Thought）、墓碑（tombstone）、中江藤樹（NAKAE, Toju）、野中兼山（NONAKA, Kenzan）、山崎闇斎（YAMAZAKI, Ansai）、崎門派（School of Ansai）